
ましろ色シンフォニー〜Another Symphony〜

Thalys-hiiragi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ましろ色シンフォニー〜Another Symphony〜

【Nコード】

N2480X

【作者名】

Thalys-hiragi

【あらすじ】

原作とは違ったシンフォニー、そんな感じです。

オリジナルの主人公達は現役プロライダーの父を持つハーフの男子生徒、天才なのに方向音痴の男子生徒、クルマ好きでアメリカナイズされた男子生徒、母子家庭育ちのクラス中心にいるハーフの女子生徒、男性恐怖症の女子生徒。

それぞれ違う色だけど合わさるとどんな色になるのかな？

新たに始まるもう一つのシンフォニーを楽しんでいただければ幸いです。

1週間に1度、原則月曜日更新、ただし変動する可能性があります

登場人物紹介（オリジナル登場人物のみ）（前書き）

後で原作名をPSP版ではなくPC版の方で入力しているのに気がついてorzな作者です。

ちゃんと野宮 結月さん出るのでご心配なくw

登場人物紹介（オリジナル登場人物のみ）

アイウエオ順で紹介いたします

小野 昭久 おの あきひさ

誕生日…4月15日。血液型…B型。身長…177?。好きな物…ハンバーガー。

「私立各務台学園」の2年生男子生徒。結月の誘いで演劇部に所属することになる。実は大企業をいくつも持つ小野グループ社長の息子。クルマ好き（主にアメ車）でバイク派の護とは良い口喧嘩仲間である。

伍代 秀一 いだい しゅういち

誕生日…5月1日。血液型…A型。身長176?。好きな物…お茶漬。

「私立各務台学園」の2年生男子生徒。生真面目で正義感の強い熱血漢。危機には勇んで駆けつけようとする仲間思いな心根にはブレがない。さらに照れつつ一言アドバイスをするシャイな面も見せたり優しい面や人間的な面も見せる。身体能力はとて高く100m走なら11秒フラットの实力を持つ。頭もよいのだが重度の方向音痴で、一度迷子になれば普通の人の3倍のスピードでトラブルに巻き込まれる。

坂井 護 さかい まもる

誕生日…7月17日。血液型…Oh型（O型の亜種）。身長…173?。好きな物…紅茶。

「私立各務台学園」の2年生男子生徒。父がフィンランド人とイギリス人のハーフ、母が日本人のクォーター（英国籍）。銀色の髪。周囲からは、冷静・温和と評価され、本人もそれを自負している節

があるが、新吾によれば、意外に感情がすぐ顔に表れる。怪談や怪物は大の苦手で聞いただけで悲鳴をあげる。女っぽい顔に女っぽい声が本人のコンプレックス。優次という4歳離れた兄が居た。学園から家まで15?と遠いため通学にはホンダ・CBR250R（優次の形見）を使用している（バス・電車共に通っていない）。夕食は8割方瓜生家にお邪魔している。ファミレスでバイトをしている（週2〜3日）。趣味はチェロ。

宮原・エリーゼ・アンジェリカ（Miya-hara・Elise・Angelica）

誕生日…3月28日。血液型…A型。身長…145?。スリーサイズ…B80/W54/H80。好きな物…スーパールの空気。

「私立各務台学園」の2年生女子生徒。柔道四段、合気道三段。スポーツも万能。英語や日本語のほかに、独、仏、蘭、北京語も堪能である。文武両道、容姿端麗。成績はいつも上位に食い込んでくる（だいたい2位から3位が定位置）。愛称がアンジェだったが結女に来てからはエリーという愛称に変わった。趣味は護に怖い話を聞かせること。家族は母親のみ（父親は不明）で、母親は某大手会社の役員。ハーフで妖艶な容姿を持ったため「吸血鬼」とも称されている。坂井 護とは小中高と同じ学校である（ただし同じクラスになったのは小学校3年と高校のみである）。

しばはら
圭

誕生日…12月2日。血液型…O型。身長…141cm。スリーサイズ…B80/W58/H79。好きな物…ポケモンとアンジェリカ。

結姫女子学園の生徒で新吾たちと同じ2-Tに所属するテスト生。本人は隠しているが同人作家。有資格は英検2級・珠算3級・簿記2級・書道2段。ただし本来はおとなしく優しい性格の少女だが極度の男性恐怖症で、男性に触られたりすると老若人畜を問わず本能

的に殴り倒してしまう癖がある。男嫌いになったのは、幼少時代に自分を溺愛しすぎた父親に、徹底的に「男は危険なもの」と刷り込まれたことが原因。恐怖症をのぞけば真面目で常識的だが、パニックに陥りやすく（特に男性と接する際）焦るとピントのずれた言動をする。統合はあまり歓迎していない。エリーが気になるらしく何時もちよっかいを出しては叩かれている。男嫌いを直すためにファミレスでバイトをしているが実は護のバイト先と同じである。

みじりかわ
たかのり
緑川 尊徳

誕生日…12月15日。血液型…B型。身長…197?。好きな物…肉。

「私立各務台学園」の2年生男子生徒。基本的に勉強できない人。悪い人ではないのだがいつも損な役回りが回ってくる苦勞人。気にかけてくれるのは美海やエリー、護（時々だけ）だった。あだ名は尊そん。口癖は「だりー」。多少天然ボケでかなりのマイペース。あだ名から「損な役回りはやっぱり尊に回ってくる」と言われたりする。

作品の特記事項。

・坂井 護は同作者の作品「乙女はお姉様に恋してる」群青の君」の主人公こと鷺宮歌織の血縁関係者である（父が血縁関係にあるため）。

・作品の世界としては「乙女はお姉様に恋してる」群青の君」と同世界である。

各キャラクターから一言

昭久「えー、怠いからパス」

秀一「とりあえず誰か俺に迷子を直す方法を教えてくれ」

護「えーっともう一つのifの物語を楽しんでいただければ光栄です」

エリー「面白いこと無いかな♪」

圭「私は・・・私わぁ・・・」

尊徳「俺は主人公になれるのか？」

作者「個性豊かになったなぁ・・・」

プロローグ「バイトの志望理由は「遊ぶ金ほしさ」ですがなにか？」（前書き）

とりあえず、先日予告したましろ色の二次小説です。

3作品同時で連載となると若干のペースダウンになるかもしれないですね。

プロローグ「バイトの志望理由は「遊ぶ金ほしさ」ですがなにか？」

どーも今回の回の語り手を勤めます、坂井と申します。
実は今、非常にマズイ状況……

時期としてはもうすぐ10月、何が変わるって？普通は何にも変わらない。

だけど、俺は違う。

8月にはバイト先に新しい人が入ったし、俺を取り巻く環境って基本的に変わらないように変わっている。

10月から俺は通学は自転車からバイクに変わることになる。

通学距離が8？から15？に変わったからだ。

別に引越したんじゃないし転校でもないぜ、学校が統合されました。

俺が通っているのは私立各務台学園、この街は駅を隔てて2つに分けられる。

山側の旧市街と平地の新市街に分けられるんだけど。

俺が住んでいるのは新市街でも隣の市に近い側でもちろん各務台までは前述の通り8キロ程度。

新市街に各務台学園、旧市街には結姫女子学園がある。

来年からこの2つの学園は統合する。

片方は新しくできた学園、もう片方は由緒あるお嬢様学校。

お世辞にも各務台学園は金があるとは言えない。

良いことと言えば女子の制服がかわいい事くらいだろう。

正直テストクラスに選ばれたのは意外だった。

俺ははじめに、この話を担任に相談し断ろうと思っていたのだが・

・。

ここで一番遠くから通学している俺が選ばれた理由が判明。
つまり、俺はこれから15キロ以上の通学をどうするのか考えろと
言うことだったらしい。

「頼むよ坂井く〜ん」

と担任に拝み倒されて、仕方なくバイク通学となってしまった。

話を戻そう、俺は友人の妹を捜して旧市街の丘の頂上にいた
あたりは真っ暗、さすがに日が落ちると丘の上からでも見つけられ
ない。

俺は新吾（友人）に連絡を取る

「日が落ちたから。もうここからじゃ探せない」

探しているのはこいつの妹、桜乃を探している。

「分かった。ごめんな、いつも探してもらって」

俺はバイトがない日（あっても呼ばれるけど）は新吾の家（瓜生家）
に夕食に呼ばれている。

「気にすんなって」

でも、桜乃（新吾の妹）は極度とは言わないけど方向音痴で・・・
そう言えばウチのクラスにも居たな頭良いのに方向音痴で迷子にな
れば通常の3倍のスピードでトラブルに巻き込まれる野郎が・・・。
「桜乃に電話したら同じく迷った子と一緒にいるって言ってたけど」
「了解、こっちが無理に探し回るよりランドマークを見つけさせて
誘導した方がいいかな？」

「じゃああの公園かな？」

「妥当だと思う、じゃあ俺はそっち行くわ」

俺は携帯を切ってヘルメットを被りNSRのエンジンをかけた

「公園は暗いから好きじゃないんだよな」

バイト帰りで繁華街しか走らないと思っていたためライトの暗い方のバイクで来てしまった。

2サイクルエンジン特有の乾いたエンジン音と乾式クラッチのシャララララという音を出して俺は公園に急いだ。

旧市街地にある大きな自然公園、明日からここを迂回して学校に行くわけだけど面倒だよな。

この後俺は今後を左右する人と出会うことはこのとき未だ何も知らなかった。

プロローグ「バイトの志望理由は「遊ぶ金ほしさ」ですがなにか？」（後書き）

新作のプロローグでした。

また後で主人公の設定とかのページを作ります。

今回は人が多いので大変です・・・

第1色「始まりの10月」(前書き)

さて、私の住む地域でもアニメが放映スタートしましたのでこちらはこちらでスロースタートさせていただきます。

第1色「始まりの10月」

十人十色ということわざがあるけれど、恋仲になったら二人の色はどう変化するんだろう？

そんな事を考えたことはあまりなかった。

1時間ほど前のことだ。バイトも終わり瓜生家に行く途中で携帯にメールの着信が来た。

「桜乃が迷子になったらしい」と言うもので俺はすぐにカガミモールにバイクを走らせた。

結局見つからずに俺は新吾と合流した。

「カガミモールを出て、それから迷子になったんだよね？桜乃」
新吾の兄としての優しい声、それは・・・いたわりが感じられる。
たとえ・・・いやこの事は知らない事にするんだった。

『うん、久々にやらかした・・・今自分がどこにいるのかも分からない』

声からすると結構体力を消費しているみたい。

「じゃあまだ日があるから俺は高台から探してみるよ」
そう言っただけ俺は旧市街が一望できる高台に行った。

しかし、電話もしていないのに妹が迷子になったかもしれない俺にメールを打てるのはすごいな。

まあ時間があるなら見てきてほしい的な内容だったしね。

そう言えばもう一人の方向音痴はまた街をさまよっていないだろうか？

あいつは頭は良いのになぜ地図の上が北だから北＝頭上になるんだ

ろうか？

桜乃ちゃんと違い頻度が多く、その上で派手に道に迷うのである。この前なんぞ誘導しているのにおかしな方向に行ってしまう学校内を3時間さまよって教室に戻ってきたりした。

話を元に戻そう。

まあ高台から探せたのはほんの数十分間だけだ。

秋になって急速に日が落ちるのが早くなったと言えいいのだろう。

普段は新市街^{しんいち}だけで用が足りるので旧市街^{あうち}なんて行かないけど、まあ明日が明日だし。

あと6時間ほどで10月になる。前述の通り今年の10月は特別だった。

新吾に渡した俺のもう1台の携帯に着信を入れると

「桜乃ともう一人迷子がいる」
という話になった。

話を聞く限りしっかり者と言った印象だったが・・・しっかり者の方が方向音痴なのか？

いや・・・しっかりしていない分野生の感があるのかも・・・。

俺は基本的に新吾と桜乃ちゃんを隔てていたわけで。

2011／09／30・・・季節は秋、わずかに金木犀の香りが漂う季節。

これはもう一つのifの世界のお話。もしかしたら・・・そんなお話。

9月30日―旧市街白結城跡公園（通称「自然公園」）

「うん、その角を右に曲がればもうすぐ見えてくるはずだから」
俺はいるだけ無駄な気がするが・・・
しばらくすると2人の人影が見えてきた。

いったいどんな子と一緒にいるのだろうか？そんな事を考えていた。
一度だけ見かけたことのある・・・あれはいつだったかな？
多分、バイト先で・・・新しい子が入った日に来てそのこと親しげに会話していた気がする。

「・・・瀬名さん？」

そんな事を考えていると新吾が瀬名さんに話しかけた。

「はい、お兄さんですよね？」

うん、この子だ。バイト先で一度だけ見た事のある子。

新吾の携帯から漏れていた声の主だ。

「見て、すぐに分かりました。想像していたとおり何ですもん！」

新吾は・・・彼女に見入っていた

「良かったわ、桜乃、これでもう大丈夫よ」

桜乃ちゃんは疲れ果てているみたいだ。大丈夫かな？明日に響くと
まずそうだ。

「お兄ちゃん？」

声が弱々しかった

「あ・・・うん」

新吾？マジで見とれてたのか・・・

「瀬名さん、本当にありがとう」

新吾が頭を下げるのにつられて俺も頭を下げた。まあ瀬名さんも迷子だったけどねと思ったのは俺だけで良いかな。

「いえ、こちらこそありがとうございました。もう大丈夫です。えっと、そちらの方は・・・桜乃のお姉さんですか？」

瀬名さんが俺の方を向いた・・・予想外のアッパーパンチと共にね・・・。

「友人です。坂井護と言います。よろしく」

俺は適当に挨拶を済ませる。

「えっと護は男なんだけど・・・」

慌てて新吾がフォローしてくれた

「ええ！？あの・・・すみません」

驚いたように瀬名さんが謝る

「よく言われるので大丈夫です・・・それにこんなお姉さんじゃあ桜乃の見本にはなれませんから」

そう言っ僕はヘルメットを持ち上げて見せた

「そんな事ない、護は立派なお姉ちゃん」

予想外の発言をしたのは桜乃ちゃんだった

「コラコラ、冗談をマジで受け取らない」

笑いがこぼれていた

「愛理、また会いたい」

桜乃ちゃんが別れ際に言った

「あたしも！あたしたちもう親友なものね」

どうやらこの二人はとても気の合う仲らしい。

「うん」

迷子になっている間にずいぶんと意気投合したな。

「二人が親友になったんだったら、俺もまたいっぺんに探しに行けば済むからいいね」

へい新吾、それはジョークか？

「その前にGPS付きケータイを持たしてあげようや・・・」

「見守り君」的な機能があるとイイネ

「もう迷いません、変な気を起こさずにいつもの道を通れば問題なかったんですから」

やっぱり瀬名さんが反論した

「お願いします、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

俺は姉確定なの！？

「ちょっ、桜乃！？また迷う気満々でどうするのよ」

瀬名さんが困ったように言った

それに対して桜乃ちゃんは

「・・・？」

どこがおかしいの？と言っているようだ・・・。

「今日は疲れたけど楽しかったから、また愛理と一緒に、お兄ちゃん達に見つけてもらおう」

俺も探す前提なんだね・・・いやバイト中でなければ探しに行くけどさ。

「ああ・・・もう、そう言われると何も言えないじゃない」

結局桜乃ちゃんの一言で反論できなくなった瀬名さん

「まあ次はもっと短い時間で合流できるようしよう」
と冗談で言ってみた

「善処する」

「善処ってあんたね・・・」

上…桜乃ちゃん、下…瀬名さん

しっかり者の瀬名さんが桜乃ちゃんにすっかり振り回されてるな・・・

・

「さて、じゃあ帰ろうか」

時間も時間出し新吾がきりだした

「良かったら瀬名さんも送りますけど・・・」

俺がそう言くと

「いえ、あたしはここまで来ればもう大丈夫です・・・すぐ、そこですし」

旧市街なんだ

「そうなんだ？」

結局、瀬名さんは一人で帰って行った。

それを見送った後

「じゃあ帰ろうか」

桜乃ちゃんは右手を新吾の手を握り、左手は俺の方に乗せた。

第2話へ続く

第1色「始まりの10月」(後書き)

あんまりテンポ良くないのですが・・・恐らく完結までに1年とかW
まあオトボクの方みたいな後書きも面白ければやってみようかと思
います。

ご意見・ご感想をお待ちしています。

第2色「碧眼の幼なじみ」

10月1日、私は朝早くから身だしなみのチャックをしていた

「ねえ、ママ。これで大丈夫かな？」

今日はママが久しぶりにいる日。何で今日は学校が休みじゃないんだろう？

「うん、大丈夫。さすが私の娘ね。でも早くしないと護君が来ちゃうわよ」

私の名前は宮原・エリーゼ・アンジェリカ、今日から私の通う各務台学園は他の学園との統合のために仮統合が始まる。

そう言えば私の通っている学校が経営危機に陥ったのは制服のデザインを某有名デザイナーにデザインを依頼したからと言う話が出るほど制服に凝っていた。

ピンポーン

「はい？」

ママがインターフォンに出た

「アンジェリカ、護君が着たわよ」

今日は初めての学園なので幼なじみの翔と早めに出て翔はバイクの道を、私は新吾君達と一緒に徒歩で歩くことに。

家を出てエレベーターへ、マンション住まいだこのエレベーターが長いんだよねえ。

どっちも14階と38階かぁ・・・歩こう。

6階からだこれなら歩く方が早い。

「翔、おはよー。いやー運転手ごころー」

私は元氣よく護にねぎらいの言葉を

「今日だけだからな、明日からはちゃんと一人で行けよ」
そう言って護は白いヘルメットを私に渡した。

「今日はいつものメットじゃないね」

いつもは黒と白のフルフェイスヘルメットなんだけど今日は銀色一色のフルフェイス。

「予備の内装が乾いてなかったんだよ。付けてた内装は交換時期だったし・・・」

なんでもヘルメットの内装でクッションが無くなるとプラスチックとか金属部分があたって痛いらしい。

「へーてつきり変な目で見られないようにする対策かと思ったよ」
護はバイクのエンジンをかけて

「今更変わらないだろ」

そう言って私を乗せてバイクを発進させた。

今日の護のバイクはお兄さんの形見なんだとか・・・

護のお兄さんは3年前に交通事故で亡くなっている。

飲酒運転のクルマに轢かれそうになった中学生の女の子を助けたことで重傷を負い、その後病院で・・・

「で？メールで言ってたドラマがどうなったって？」

え？ドラマ？あーそう言えば昨日やっていたドラマでどんでん返しがすごすぎて理解できなくなりそうだったって言うメールをしたんだった。

「昨日のはすごかったんだよ。主人公の刑事さんの部下が実は犯人の親玉でね、怪しいと思った人たちは次々に失踪しちゃってね・・・あれ？その道はまっすぐ言った方が・・・」

護は直進するはずの道を右に曲がった。
方向的には最終的に間違っではないけど500メートルくらいの

遠回りになる。

でもあの道はお兄さんが……。

「ほれ、着いたぞ」

それから数分後、いつもの待ち合わせ場所に到着。

うん、いつものみんなが揃ってる。

「じゃあ、学校でな」

そう言って護はみんなとの挨拶もそこそこに行ってしまった。

まあ学校で会うかな。

しばらく歩いていると……メールを見ていた隼太が早速トラブル発生という顔

「トラブル？」

と聞くと

「まあ、風物詩って行っちゃえばそんなもんだけど、秀一がまた道に迷った……一応は護が回収に行ってくれた」

伍代秀一、謎の知識を持って謎めいた発明品を作り続ける……というか役に立たない発明をする天災（これで合ってます）。

彼の開発した機械で役に立ったものはないという……（例…画面がセパレートするゲーム機）。

旧市街に入ってズンズンと歩いていくと公園が見えて、その後に結姫女子学園が見えてくる。

ここはお嬢様学校と言われる部類に入る私にはあんまり縁のない所かな？

うん、家のマンションからも見えるけどやっぱりお嬢様学校だね。というか……無駄に豪華。

手入れの行き届いた庭、風格ある校舎そして笑顔のメイド……

・・・メイド？

「ねえ、新吾・・・アレってメイド？
メイドがいる学校・・・」

「おかえりなさいませー」

これ突っ込むところ？

啞然としたわ。こりゃ一本とられたね。

「えーっと・・・ただいま？」

いや新吾、それは違うと思う・・・

「はああ！」

ほらメイドさんも驚いてるし・・・。

「アンジェ、初めてあったお方に「ただいま」と行っていただけなのは初めてです！さてはできるお方なんですね！アンジェビックリです！もしや華族か貴族のご子息様でしょうか？確かにどこことなく気品のあるお顔立ちいゝ！あゝあこのような無駄話をご静聴いただくのも久しぶりでございます！」

アンジェ？愛称が・・・一緒に？

「アンジェはわたしい！」

まさか同姓同名で姉妹だったとか・・・

「何やってるんだ？」

そこに来たのは護だった。

「結女の小粋な歓迎ネタなのか？」

「ビックリして帰る人も良そうな気が・・・」

「だね・・・」

上から隼太、桜乃、新吾

あ、護が取り残されてる。

「それはご心配なく、キッチンとご案内いたしますので
やっぱり取り残されてる。」

「じゃあ、結女の職員さん？」

状況を察知したのか護が聞く。

「いえ、ご案内こそいたしておりますが、このアンジェ、野良メイドなんですよ」

「野良・・・」

「・・・メイド？」

上が新吾で下が桜乃ね

「さようでございます。アンジェリーナ・菜夏・シーウェルと申します。お見知りおきくださいませ。皆様は仮統合期間のテスト生でいらっしゃいますね？順次行動にお集まりいただいております。こちらへどうぞ」

歩き出すと護が

「なんか取り残された気分だぜ・・・」

かわいそうではあるけど後で説明するから。

「護、気にしたら負けだよ。ところであの天災は？」

天災は秀一ね

「あの方向音痴だったら保健室に担ぎ込まれたから心配するな」

いったい何があったのかは聞かないでおこう・・・

「まったく、あのくらいのバンク角で驚くなよな・・・後3度は倒せたのに・・・」

聞かなかったことにしておこう・・・。

ママ、なんというか前途多難です。

第3話へ続く

第2色「碧眼の幼なじみ」(後書き)

新吾「後書きDE主人公紹介！」

護「イエーイ!!」

新吾「タイトルコールだけでどっと疲れたよ・・・」

護「さて、今回から後書きには登場人物の紹介を入れていきたいと思います。え？専用ページあるのに？いやいや、本人がいるとかけないことも書くからね」

新吾「と言うことでお付き合ってください」

護「まず、宮原・エリーゼ・アンジェリカ(Miyahara・Elise・Angelica)」

新吾「彼女は「私立各務台学園」の2年生女子生徒で護の幼なじみなんだよね」

護「腐れ縁だな。ただし同じクラスになったのは小学校3年と高校のみだけ。誕生日…3月28日(牡羊座)。血液型…A型。身長…145?。好きな物…スーパの空気」

新吾「好きな物がおかしいと思うよ?」

護「新吾、気にしたら負けだよ。ほらすーとしたあの野菜売り場の空気は・・・」

新吾「良い感じって事?」

護「青臭い・・・」

新吾「ダメじゃん・・・」

護「金髪、碧眼を持つハーフの少女で愛称はアンジェだ。柔道四段、合気道三段。スポーツも万能。英語や日本語のほかに、独、仏、蘭、北京語も堪能である。文武両道、容姿端麗」

新吾「被ったね・・・見事に」

護「俺もビックリだ、むしろ作者がキャラを考えてるときにはそんな事気にしてなかったらしいからな」

新吾「それは酷い」

護「でも彼女は母子家庭の育ちなんだ。実は父親は彼女が生まれてすぐに航空機事故でなくなっている。でも明るくて良い子だと思う」

新吾「ハーフで妖艶な容姿を持ったため「吸血鬼」とも称されているんだよね」

護「まあハーフだからって理由でいつも特別視されてるのを本人は気にしてるみたいけどな」

新吾「それは君も似たよに行ってたね」

護「さて、今回はアンジェリカのみの紹介です。まあ1話に付き1人の紹介が限界なので・・・」

新吾「では第3話をお楽しみに」

ご意見・ご感想をお待ちしています

第3色「思わぬ再会」(前編)(前書き)

更新が遅れたことをお詫びします。

第3色「思わぬ再会」(前編)

私は統合に反対。だって・・・平気だと分かって居ても男の人を見ると殴ってしまいそうだから。

続々と集まってくる各務台の男子・・・怖い。

え？私は誰かって？・・・あー自己紹介忘れてた。

私は芝原 圭、2年のテスト生。

趣味はポケモン。アレって奥が深いのよね。

乱数調整とかチートじゃなくてちゃんとした厳選から初めて国際ふ化とかやってるとすぐに300時間とかこえちゃうけどね。

それは良いとして、まずは講堂に集められているらしい男子生徒が群をなして来ると思うと・・・怖い・・・。

ガラッ・・・

扉が開いて入ってきたのは・・・

「え!？」

見知った顔だった。

坂井 護君、バイト先で私の研修を担当してくれたフロアセミチーフ。

確かに私立高校生とは聞いていたけれどまさか各務台の生徒だったとは・・・。

私は思わず立ち上がって護君のほうへ行こうとすると

「あ・・・」

そう言っただけ彼は頭を抱えだした。

そう言えばバイトに入ったときに私が「外で会ってもできるだけ他人のふりをしてください」と言っていた事を思い出した。

「どうしたんだよ護、あの子に見とれたか？」

そう言って私に近づいてくるもう一人の男子・・・怖い怖い怖い怖い怖い怖い・・・怖い！

そう思ったら手が出ていた。

手じゃないや足だった。

圭 side out

護 side in

あー行っちゃった・・・。。死に行くようなもんだぞ秀一。
と言っている間に芝原さんはきれいな回し蹴りを決めた。

「グハアツ・・・。」

空中に弧を描き天災こと秀一は

南無三、秀一。君のことは忘れないよ。

「圭、まさかあんたやっちゃったの!？」

秀一が吹っ飛んだ音を聞いて乾さんというさっき講堂で待っていた
結女の生徒が飛んできた。

「気にしなくて良いよ、乾さん。こいつ打たれ強いからすぐ復活する」

そう言って転がっている秀一の首根っこをつかみずると席に座らせる。

せめてもの救いはこいつが軽いことだな。重量級でなかったことを
ありがたく思うよ。

と言うか初日ではまだ雰囲気がかめておらずまだ手探り状態が続いていた。

放課後、バイクの使用手続き関係で職員室から出てきてスケジュー
ルを確認するとバイトだった

「さて・・・今日はバイトか・・・」

スマートフォンをしまい、キーホルダーからキーを出す。

にしてもSO-01Dは重いのが難点だな。^{スマホ}

専用ケースはバイクに絶賛固定中だ市販用ケース買うしかないか。

「あれ、護って携帯買い換えたの？」

振り向いたら奴がいるって・・・違うな振り向いたら隼太がいた。

「ん？ああ、これはネット専用だけどね、N2701（普通の携帯）はまだ持ってるよ」

そう言っただけで携帯を見せる。この機種は2003年に初めて持った機種で、電池パックが家に5個くらい有ったはずだ。

「綺麗につかってんなー」

いや、外装リフレッシュは2回したけど4年に1回のペースだし。

「まあ・・・な。じゃあ俺バイトがあるから」

そう言っただけで俺は学校を出た。

バイト先まではバイクで30分、街の中心部よりちょっと隣町側の住宅地に隣接するように立っている。

ヘルメットを被り、グローブを付け、キーをONにして足をキックペダルの位置に持ってきたときに

「あ、今日はセルがあるんだ」

足を戻してセルのスタータースイッチを押す。

何となく恥ずかしくなって周りを見た。

良かった、誰もいない。

バイト先にはちょっと早めに入るようにしている。

そして鉢合わせするのが通り魔こと芝原 圭さん。

いや、4回くらい殴られたかな・・・死んでないことがせめてもの救いだわ。

着替えを済ませてタイムカードをパウチ。

「フロア入ります」

と言うことで今日のバイトがスタートする。
見る限り芝原さんはもうフロアに入ってるみたいだけど・・・。
死
人が出ないことを祈るばかりだ。

第3色「思わぬ再会」(前編)(後書き)

新吾「ここでお知らせがあります」

護「作者がしにかけのため、今回作者の代わりに「乙女はお姉様に恋してる」群青の君」より鷺宮 歌織さんに来ていただきました」

歌織「何このカオス・・・」

護「さて、気を取り直しまして歌織さん」

歌織「はい」

護「学院生活には慣れましたか？」

歌織「その話はまた別の機会に・・・っていうかましろ色のことを話しに来たのですよ」

新吾「で・・・ではですね、作者さんが死にかけとのことなんですけど、容態は？」

歌織「5月病です」

護「今11月だよ？」

歌織「学校行事以下略で何の因果か疲れてるらしいです」

護「つまり・・・ただ単に後書きに出るのが怠いだけ？」

歌織「そうなりますね」

新吾「ダメダメだね・・・」

歌織「次は・・・主人公紹介ですか」

護「今回は伍代 秀一についてだね」

新吾「誕生日・・・5月1日。血液型・・・A型。身長176?。好きな物・・・お茶漬け」

歌織「前回に比べると普通の子ですね」

護「「私立各務台学園」の2年生男子生徒。生真面目で正義感の強い熱血漢。仲間思いな心根にはブレがない。意外にも相当な達筆で

もある。頭もよいのだが重度の方向音痴で、一度迷子になれば普通の人の3倍のスピードでトラブルに巻き込まれる」

新吾「いつも大変だもんね」

歌織「結構いい人なんですネ」

護「でもね、まじめな割に女性経験は皆無だからね、その上でわざとおちやらけて今回みたいに吹っ飛ばされるわけで……」

新吾「たしか、趣味は発明だったよね？」

歌織「役に立つものと期待しておきます」

護「えーっとね、画面が分割できる携帯ゲーム機」

歌織「無意味……」

新吾「あ、でもその特許は良かったって聞いたことが……」

歌織「そうですか……」

護「まあ自称発明家っーかマッドサイエンティストだな」

歌織・新吾（（酷い評価……））

新吾「と言うわけで、第3話後書き、そろそろお別れのお時間になってしまいました」

歌織「やっとな家にも帰れるんですね」

護「次回は作者が来てくれることを祈ります。ゲストは「乙女はお姉様に恋してる」群青の君」主人公、鷺宮歌織さんでした」

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

第4色「思わぬ再会」 (後編) (前書き)

今回から1週間に1度更新。

目標は月曜日ですが遅くなるかも・・・3作品同時って辛いですね
(自分で進めという何を言ってるんだかww

第4色「思わぬ再会」(後編)

「はい、それでは注文の確認をさせていただきます。トリプルチーズハンバーグがお一つ、フレッシュ野菜と魚介のサラダがお一つ、ドリンクバーがお一つ。以上でよろしいでしょうか？」

一応言っておくが俺は意図的に絶対芝原さんに近づかないぞ。殴られるのはごめんだからな。

バイトも半分を消化し休憩時間。

「で？結局同じ学校になりましたけど、どうするつもりで？」

休憩のお茶を飲みながらこれからのことを聞いてみた。

「どうするも何も・・・今までと同じようにしていればいいと思う・・・一応他人のフリしててもらえれば・・・なんとかなると思う」
何とかってオイ

「無謀に近いと思いますけどね。いくらあの学校の校則がバイトダメだからってそう言う手できますか・・・。いつかはバレと思いますよ？」

だっていつも仲間が集まるのはココだし。

その後、結論が出ないままいつも通りの休憩になり・・・

「げ・・・、ジュエル持ちかよ・・・でも相手は混乱してるから勝機はある！」

「甘いです！混乱しても素早さなら私のサーナイトが上です！」

「甘いのはそっちだ！俺のラプラスは耐久力で絶え凌いで絶対零度でその幻想を打ち砕く！」

絶賛ポ○モンバトル中

「お前ら・・・楽しそうだな」

同じバイトの人で現役大学生の坂本さんですね

「いやバトルで読み間は面白いですけどね。・・・てか芝原さん、速攻で俺の後ろに来るのやめてもらえませんか？命の危機を感じるんですけど」

坂本さんの登場にビクつき俺の後ろに隠れる芝原さん。

「っだ・・・大丈夫！加減できると思うから」

思うって何だよ・・・殺す気か？

「お前ら仲が良いのはいいが程々にしておけよ」

やっぱりなんか誤解してるよね、この人。

「もう！坂井君のせいで変な風に間違われてるんですけど」

そう言って俺の腕をねじ上げて・・・っ！痛っててててて！

「だから俺の腕をそうやってねじ上げるな！！」

結局はいつも通りってことか・・・。

バイト終了後

Fm..瓜生 新吾「Singo-SpecR@SanLexar.
ne.jp」

タイトル..夕食

添付ファイル..ナシ

本文..今日も夕食を用意してあります。いつも通りの時間なら冷めないから大丈夫です。

「了解、了解」

そう言って返信する

F m…坂井 護「TRIAL—Suzuka750Miles@S
anLexar.ne.jp」

タイトル…Re…夕食

添付ファイル…ナシ

本文…了解、もう終わったからすぐに行くよ。

携帯をしまいバイクのエンジンをかけて暖気を始める。

裏口から出てきた芝原さんに

「じゃあ今まで通りってことで、・・・またバイトで
そう言ってヘルメットを被る。

「うん、またバイトで」

ヘッドライトを点けるのを忘れそうになるが・・・ほらこのバイク
自分のじゃないし。

兄貴のだしね。

そして今日も瓜生家にお世話になるのだった。

説明しておくけど俺は別に瓜生家に居候してるわけじゃない。

ただ両親同士が交友があつてと言うだけだ。

初めてあつたのはまだ・・・いやこの話は忘れることにしたんだっ
た。

つまらないことを考えていたらもう瓜生家についてしまった。

次話に続く

第4色「思わぬ再会」（後編）（後書き）

護「さて今回こそ作者が・・・と言いたいのですが」

新吾「作者が風邪のため今回はゲストとしてIS インフィニット・ストラトス・ツインドライブの使い手より赤城Ⅱポルシェ・翔さんをお呼びいたしました」

翔「ども、赤城です」

護「さて、もう面倒だから2人の主人公に代わる代わる出してもらえば良いんじゃないか？」

翔「俺の意志は？」

新吾「仕方ないかもね・・・」

護「さて、今回は3人目芝原 圭」

新吾「誕生日・・・12月2日。血液型・・・O型。身長・・・141cm。好きな物・・・ポケモンとアンジェリカ・・・」

翔「ソッチ系の人なのか・・・」

護「俺はよく知らない・・・とは言わないが危険人物であることは事実だな」

新吾「結姫女子学園の生徒で新吾たちと同じ2-Tに所属するテスト。生統合はあまり歓迎していない」

翔「社交的じゃ無いな」

護「君もあんまり社交的じゃないけどね・・・聞いた話によると・・・」

翔「はいはい、すいませんね」

新吾「本来はおとなしく優しい性格の少女だが極度の男性恐怖症で、男性に触られたりすると老若人畜を問わず本能的に殴り倒してしまう癖がある」

翔「男嫌いになったのは、幼少時代に自分を溺愛しすぎた父親に、徹底的に「男は危険なもの」と刷り込まれたことが原因と・・・こうやって喋ってる方が気が楽だな」

護「その男嫌いを直すためにバイトを始めたって聞いたよ」

新吾「エリー（アンジェリカ）が気になるらしく何時もちよつかいを出しては叩かれている。男嫌いを直すためにファミレスでバイトをしているが実は護のバイト先と同じである」

翔「俺がいる意味ないじゃん、コメントしづらいよ、一応コメントするとやっぱリソッチ系の子なんだね」

護「まあまあ、でもバイト先は一緒だったことに関して一言。マジで殴られるのは勘弁してほしいところだ」

護「そろそろお別れのお時間ですね」

新吾「はい、それでは次回も作者の駄文ですがお付き合いください」

翔「次回、ましろ色シンフォニー〜Another Symphony
ny〜第5話「失敗と挽回のチャンス」（前編）お楽しみに」

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

第5色「失敗と挽回のチャンス」(前編)

仮統合が始まり1年および2年のテストクラスでは平常授業がスタートする。

各務台男子は女子に比べて歓迎されていない。

それはこの学園が女子校であったことが大きく関わっていることは明白である。

しかし、仮とはいえ統合したわけだ、それに伴う弊害も発生する。たとえば？

例えば体育終了後に着替えるわけだ

「しかし、体育は疲れるわ、ところで秀一よ50メートル何秒だった？」

隼太が伸びをしながら秀一に聞いた

「5秒58だったよ、過去ベストより0.2秒くらい落ちたかな」

※5秒台は世界記録です

「お前はドノバン・ベイリーよりも速かったのかよ」

※ドノバン・ベイリー…50メートル競走世界記録保持者。

と護がツツコミを入れる。

「流石、雑学王だな。秀一よりもドノバン・ベイリーを覚えてる護が凄いわ」

と声をかけてきたのは元陸上部の尊こと緑川みどりかわ尊徳たかのりだった。

こんな風に雑談しつつ廊下を進む一行。

もちろん男子と女子は別々に着替えるため男子が早く着替え終わってしまふと……教室には入れない。

一ガチャ

が、それを忘れて新吾が教室の扉を開けてしまったわけで……
「え？」

「あ・・・」

声が重なった

以下ご想像にお任せします

一昼休み

「各務台^{ウチ}の女子まで敵に回したな・・・」

護は新吾達と話しながら現状を整理していた

「何だって？護、話聞いてな駆ったからもう一回説明してくれ」

脳天気になんな話は聞いていないという顔のこいつは小野 昭久、ただのアメリカンバカである。

「現状の各務台男子に対するクラスの評価だよバカ・・・」

昭久に呆れながらちゃんと説明をするところが護の良いところなのかもしれない。

護の状況まとめ

- ・瀬名さんを含めてテストクラスにも統合を歓迎していない者は多い
- ・それは新吾の失敗で男子に対する風当たりはかなり強い
- ・男子の評価は落ちようがない

どうすればいいのか？と言うのが今回の議題である

「まあ、新吾は頑張ってると思うけどな・・・空回りって感じか？」

紙パックのイチゴミルクを飲みながらすっかり暗い表情の新吾に昭久が声をかけたが・・・

反応無し

「返事がない、まるで屍のようだ」

「「おい・・・秀一」」

ドラクエのようにふざける秀一に対して護と隼太の声が重なった。

「でもなあ、現状で一番の被害は秀一と俺のような気がするよ」

護の隣で頭を抱えている巨体は尊徳である。

「確かに、秀一は初日に蹴り飛ばされるし、尊は変なところで損な役回りだし・・・」

護のまとめ通り男子の評価は落ちようがないところまで落ちたらしい。

一同ががっくりしているところにアンジェが通りかかったので秀一が「アンジェはどう思う？ 統合には反対？」

ストレートに聞いてしまった

「いや、もうちょっとオブラートに包めよ・・・まあいいや、その・・・どう思うかな？」

まあ男子の行いからするとあまり良い評価は期待できないがダメ元で聞く護

「アンジェは生徒さんが増えてもいっこうにかまいませんです。アンジェのご主人様になっていただけるかもしれない方が増えるってことですからね」

そう言う視点で物事を見るアンジェは男子にとって女神にも見えたという。

「あーそう言う視点もあるんだね。まあエリーは別として他の女子はまずいぞって・・・イデデデデッ・・・ステップオーバーフェイスロックは痛い！！」

護がポツリと言いかけたところでエリーにフェイスロックされた。

※自分の腕を相手の頭部に回し、腕で相手の顔面を締め付けることにより、圧迫によるダメージを与える技。

「なんか変なこと聞いたんだけど？ 何かな？ 別として？」

そしてその体勢からエリーはコブラクラッチへ移行。

怒ったエリーを止めるのに5分の時間を要しました。

「すまん、確かに昔のことを引き合いに出そうとしたのは謝る。だ

があそこで極技は無いだろ・・・殺す気か？」

今度は護が青筋を立てている・・・

どうなることやら

次話に続く

第5色「失敗と挽回のチャンス」(前編)(後書き)

作者「後書きで！」

アンジェリカ(以下エリー)「登場人物紹介!!」

作者「さて、やっと作者が来ましたよ、後書きに」

エリー「遅かったね」

作者「某映画の前売りを買うために並んでました」

エリー「呆れた・・・(私も並んでたけどね)」

作者「ほら、でもちゃんと更新しておいただろ？」

エリー「確かにね」

エリー「今回紹介するのは？」

作者「小野 昭久、誕生日…4月15日。血液型…B型。身長…177?。好きな物…ハンバーガー」

エリー「作者さんはこの方とはどういう関係だったんですか？」

作者「うーん結構口論はするね」

エリー「へー、ケンカするんだ」

作者「良い奴ではあるけどね、アメリカナイズされたバカだから・・・」

エリー「実は結構繊細な心の持ち主で、実家のことを持ち出されると怒ったり」

作者「以前はいつも特別扱いでそれに嫌気がさして一人暮らし始めたらしいからな」

エリー「モデルの人は？」

作者「家族関係には立ち入らないのが俺のスタンスだ」

エリー「知らないのね」

エリー「作者が用字があるそうで帰ってしまいました・・・もうホントにだらしない」

エリー「さてもうお別れの時間となってしまうした、次回もよろしくお願いいたします」

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

第6色「失敗と挽回のチャンス」（中編）

護Side

翌週、特別カリキュラムなる授業が再開された。

さて、この特別カリキュラムなのだが学園長の意向で「女を磨く」カリキュラムらしい。

それはそのカリキュラムのお話。

「俺たちも女を磨くのか？・・・謎だな」

朝学校来ると尊が難しい顔をして考え込んでいた

「どした？顔色が悪いけどなんか悪いもんでも食ったか？」

俺は自分の席（尊の前）に腰を下ろし机に突っ伏している尊に話しかけた

「いやな、さっきまっちー先生に捕まってさ、教室に持って行って欲しいって言われたのが教卓においてあるプリントなんだが」
そう言っているのでプリントを持ってきた。

「調理実習ね・・・なにに？この特別カリキュラムは結姫女子学園の生徒として恥ずかしくない能力を身につけるためのカリキュラムです・・・」

つまり男子にもその知識を付けろと？

料理なら何とかなるけど・・・面倒くさいな。

結局俺まで朝の読書を妨げられる結果になった。

ー3時限目、特別カリキュラム

「本日の特別カリキュラムは、栗ごを使った炊き込みご飯を作ります」

この特別カリキュラムを担当するのは教師ではなく教員免許を持った栄養士などで今日は調理実習。

俺の班は俺・新吾・隼太・エリー・瀬名さん・乾さんの6人班だ。

ここで無駄ではあるが栗ご飯（入れる物が栗のみの場合）の作り方を紹介しておこう。

1…下ごしらえ編

？まず、米なのだがコレは綺麗に洗っておく。

護メモ…間違っても洗剤で洗うなよ。一般的には米をとぐって言うの方が良いかもな。

？栗は熱湯につけてから鬼皮のザラザラした部分に包丁の根本で浅く切れ目を入れはがすように鬼皮をむく。その後アク抜きした栗は一粒を2つくらいに割りさつと熱湯に通して水に浸して冷やした後、水気を切る。

2…作り方編

？土鍋に下ごしらえしておいた米と栗を入れ適量の水、塩を加えて強火にかける。

煮立ったら中火にして吹きこぼれないように注意して炊く。その後弱火で5分程度、火を止めて10分程度蒸らしたりする。

こんな感じ。

ちなみにメンツとしては

俺…一応はバイトで厨房も任されることがあるので大丈夫。以前に料理は得意。

エリー…コイツの料理の腕は侮ってはいけない。母親のためにスコッチエッグ（イギリス料理の一つ）を作る奴だからな。

新吾…桜乃の手伝いでなれてるから大丈夫だろう。

隼太…未知数。というか料理できるの？

瀬名さん…未知数。まあ大丈夫だと思う。

乾さん…未知数。よく知らないし、まあ結女の生徒だし大丈夫だよ。

分担してやっていくわけだが、俺は野菜関係を切る係らしい。

トントントントン

規則正しい包丁の音、イイネ

まあ料理自体は好きだし楽しいけど・・・だけどさ・・・男子が使える。

栗のむき方位は分かるだろうという安易な考えでやるなよ・・・手をけがするぞ。

「はい、こっちは終わったけど、後なんかやることある？」

早々に自分の作業を終えた俺は乾さんに他のことを聞いてみた。

「ええ！？もう終わったの？うーんじゃあちよつと早いけど土鍋出してくれる？」

そこまで驚くかな？いや一応普通に切ったんだけど急いだ訳じゃないしね。

「わかった。土鍋ね。その後はゴボウかな？」

ぱっと見て後回しにしそうなゴボウ、

その頃ダメな男子と言うレッテルの中で新吾はめざましい活躍を見せていた。

例えばよく気がつく性格で米をといでおくとか、米をといでおく最中に他の人が来たらちゃんと場所を空けるとか。

むしろそう言う気遣いに他の男子は欠けている。

そして女子の注目の的になるまで時間はかからなかった。

「ねえ、瓜生君と坂井君で・・・」

「「邪魔はしないし、気が利くし、作業速い」」

どこかの班でそんな会話があったと後で秀一から聞いた。

ちなみに土鍋を持ってきた後はゴボウのさがき

栗をむき終わった隼太をさがきに引き込んでさがきを教えた。

ささがきは鉛筆をカッターやナイフで削るのと同じ要領でゴボウを削っていく。

ゴボウに限らず細い野菜なら何でもできるから試してみると良い。なんてことを隼太に説明しつつ横を見たら新吾も参戦していた。

「負けませんよ、新吾さん、護さん！」

なんというか菜夏さんが闘志をむき出しに……。

「俺は戦いたくないな……」

俺は油揚げの油抜きに周り、その場を離脱した。

つーかあんなにゴボウのささがき作ってどうすんだよ……

最終的には女子が男子を使うという構図が展開されていった。

土鍋を火にかけていったん終了。

みんな結構満足感に満たされてるけど

「なあ新吾」

しかし俺は言っておきたいことがあった

「どうかしたの？」

頭を抱えつつ新吾にこう切りだした

「土鍋の大きさが大きいのは良いとして、量的には多すぎる気がするの俺だけか？」

そう、クラスの人数に対して確実に炊き込みご飯の量が多いのである。

瀬名さんなら気がついていないのかと思い見渡してみると……。

瀬名さんはそのとき味噌汁を作っていて気がついていないのである。

さて男子の評価を上げるチャンスなのだが……どうなることやら。次色へ続く

第6色「失敗と挽回のチャンス」（中編）（後書き）

新吾「第6色でした」

護「しかし作者も面倒なこと説明させるよな、炊き込みご飯はそのほかの説明が怠いから栗ご飯で代用ってww」

新吾「なんか家の料理本に栗の炊き込みご飯が載ってなかったんだってさ」

護「そこな脳内補完で書くべきでしょ、そのくらい作者でもできるはずだし」

新吾「そこまで言わなくても・・・」

護「時間もないし、とっととこれからの展開を予告して終わらせようぜ」

新吾「眠いからってそんなにトゲトゲしくならなくても・・・」

護「ようやく完成した炊き込みご飯、でもそれには大きな問題が？」

新吾「男子はこのイベントをどう乗り切っていくのか？」

護「とりあえず俺の扱いは酷かった・・・」

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

第7色「失敗と挽回のチャンス」(後編)

護side

結局できあがった炊き込みご飯は普通に食べたのではもちろん消費できる量ではない。

「どーすんだよこれ」

俺だって食べられても2杯前後なんだからさ

「たしか特別カリキュラムで作った料理って・・・」

瀬名さんの顔があまり良い色してないぞ？なんで

その答えを笑顔が引きつった栄養士の先生が言った。

「すべて食べないと単位にはなりませんよ」

え？単位にならない？ハイ？俺の聞き間違い？

アタフタと混乱している俺に昭久が

「大丈夫だって、ウチのクラスには人間ブラックホールが二人もいるじゃないか」

いや昭久よ・・・ブラックホール扱いはいくら何でも酷いだろ。

「じゃあ秀一と尊に頑張ってもらいますかね・・・。まあ・・・ね」
そう言って隼太と新吾に目線を送る

ーコク・コク

了解の頷き

そしてその頷きは男子全員に広がっていった

「俺めっちゃ腹減ってるからドカ盛りで頼むわ」

「俺も俺も！超大盛りで頼む」

そうだな、男子ってこんなことくらいしかできないしな。

だけどさ、何故俺は普通に盛られてるんだ？

大盛りでも良いぞ？

「いや、なんかお前の分は普通でも大丈夫そうだぞ？あの大食らい二人が超ドカ盛りで大量消費してるからな」

そう言って昭久の言う方向を見ると・・・なんと秀一と尊が大量の炊き込みご飯を消費していた・・・

というか尊は日課でフルマラソンを2セットくらいするらしいから大丈夫だけど秀一はどうやってあの膨大な量のカロリーを消費するんだろうか・・・ああ、頭脳労働か・・・。

「でも普通に持っても結構ボディブローみたいに来るな・・・」

俺の隣で若干大盛りの茶碗を片手に昭久がしっくはっくしていた。結構もち米ってボディブローのように効いてくるんだよね。

「それには同意する。俺さ・・・今日は学食の予定だったけど昼飯要らないわ・・・」

俺も一応炊き込みご飯を2杯食べたんだけどこれが結構ね・・・その胃に来る

誰だようどん入れた奴は・・・。

変に伸びて大変なことになってるぞ・・・。

「なあ、あの二人ヤバイって、あんなに早食いして・・・」

と言う昭久だが・・・それは少し違うんじゃないか？

一度に大きくご飯を口に入れる尊と回数が多いが一度に多く入れない秀一。

つまり歩幅の大きいゆっくりとしたペースの尊と小さい歩幅で速いペースの秀一。

それでも章ピペースはあまり変わらないのか・・・水の消費量も概ね一緒か・・・

「でも、水の飲み過ぎはよくないから・・・最悪死ぬし」
ボソッとそんなことを言うとな新吾が

「え？それホントに？」

そうだよ、普通の人は知らないか・・・

「ああ、実際2007年にはアメリカで死者が出てる。なんでも人間の腎臓の処理能力を超えるペースで水を飲み続けて血液中のナトリウムイオン濃度が低下すると100meq/L（ミリイクイバレント・パー・リットル）程度で死ぬらしい」

※meq/L（ミリイクイバレント・パー・リットル）

食塩（NaCl）のような電解質は水に溶解したときには、Na（ナイオン）とCl（ーイオン）が同じ重量で反応するのではなく、エキイバレント同じ当量で反応する。

イオンには原子量があり、原子価がある。

Naの原子量は23、原子価は1価、Clは原子量35.5で原子価は1価であって、食塩は23gのNa（ナイオン）と35.5gのCl（ーイオン）が結合して58.5gの食塩（NaCl）が出来るのである。

g当量で表すには体内では量が少なくすぎるので1,000分の1の単位、すなわちmg当量（meq）で表すのが一般的で、最も適した量がミリエキイバレント／リッター（meq/l）である、すなわち、この値は1リッター中の溶質のmg数を原子量で割って、これに原子価を掛けたものである。

「ほー、水の飲み過ぎも気をつけないといけないな」
隼太がよく分からなそうに言っていた。

まあよほどのことがない限りは大丈夫だともうけどね。

その日の昼食はやはりやめておいた・・・

さて、その日のLHRではクラス委員を決めることになった。

「できれば男女別々に出して欲しいのだけれど・・・」
まっちー先生・・・自信ないのは良いけど語尾はちゃんと分かってね

とにかく男女別2人のクラス委員を選出するのだが、結女側からは当然女子しか出ない。
従って各務台側からは男子を出すというのが前提になってくる。

本来なら我らが生徒会長である隼太に任せたいところではあるが・

「どうする？とりあえずバイト組と生徒会はダメだろ？」

俺はバイトだし隼太は生徒会だから各務台とはいえ恐らく副会長とかその辺の待遇ではあるはずだ。

「俺はこっちの生徒会に副会長待遇で組み込まれてるからクラス委員はできないんだよ」
はい、予想通りの展開キタコレ

「じゃあ残るは・・・」

新吾の一言で俺を見る？俺はここではそう言う役回りはやりたくないよ？

「おいおい、俺はバイトがあるんだけど・・・」

俺は基本的に親からの仕送りを必要最低限の家のライフラインを保つために使用している。

余った分？貯金してもしもの時に積み立ててるよ。

だから交遊費は基本的に自分で稼ぐことになる。

バイクの燃料代とか遊びに行ったときの交通費や食費とかそのあたりの出費はすべてバイト代で捻出することになるのだ。

「じゃあ残るは・・・」

部活もしていなくてみんなをまとめられるリーダー的存在。

「新吾だな」

秀一の言葉にみんなが同意した。

「じゃあ新吾に決定ってことで」

本人の了承無しで勝手に決める昭久

「わかったよ、やるよ」

決定。

結女クラス委員…瀬名さん

各務台クラス委員…新吾

おおぅ……なんというか、避けられてる新吾と避けたい瀬名さんか……

まあ予想できる結果だったのは言うまでもない。

クラスのまとめ役でみんなの信頼を集められる二人と言うことで条件に一致するのはこの人達しかいないだろうな。

さて、一応は男子の信頼も新吾と俺の動きをまねした男子達の活躍により多少は回復したと思う……多少はね。

次色へ続く

第7色「失敗と挽回のチャンス」(後編)(後書き)

新吾「いやーまさか水の飲み過ぎで死者が出るなんて知りませんでしたよ」

エリー「まあ護だから知っていることなのかもしれないわ」

新吾「なんかエリーの元気ないけど大丈夫？」

エリー「私も結構食べちゃったからお弁当食べられなくて大変だったのよ」

新吾「確かに女子でも結構大盛りの人いたよね、それ以前にエリーは・・・」

エリー「ちよつとね・・・その圭がね・・・」

※芝原 圭はエリーにちよつかいを出していたようです

新吾「それは大変だったね・・・」

新吾「さて次回は？」

エリー「とりあえず新吾達は適当に悩むことになりそうかな」

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

第8色「変わり始めたクラス」そして彼女は」(前編)

エリーゼ side

あの特別カリキュラム以来、各務台男子の評判は一応持ち直していた。

たとえば今日もこんな事があった。

朝礼前に結女の子に相談を持ちかけられたのでこのたぐいが好きな人に回しておいた。

「ねえ、坂井君、この時計って直せるかな？」

彼女が持ってきたのは腕時計だったそれも年代物で電池を交換しようと思ったけどわからなくて私に相談したんだそうだ。

「とりあえず見てみるよ」

まず護は文字盤に書かれた形式をスマートフォンに打ち込んでいく。

「セイコーのスポーツマン デイト17石か写真を見る限り60年代の物だからこのつまみをこう回すと・・・」

といって護が右側に付いているつまみを回していくと・・・

「ほら、これで動くよ」

先ほどまで動いていなかった時計が護の手にかかれば・・・っていうかねじ巻いただけけど・・・

「すごい！。ありがとうございます」

その子はいれしように自分の席に戻っていった。

「優しいね。やっぱり猫かぶってないといけないから辛い？」

普段(というか以前の)の護よりも話し方に気をつけているのか若干言いが柔らかい。

「相変わらずなのはアンジェのほうだね。俺は一応セイコーユーザーだから優しいだけさ」

ああ、そういえばそんな名前の会社の腕時計してたっけ？スピードマスターとか言うの。

※護は宮原・エリーゼ・アンジェリカをアンジェと呼びアンジェリーナ・菜夏・シーウエルを菜夏さんと呼んでいます。

その後もクラスの男子と女子の亀裂は修復されていったみたいで、実際対立しているのはもしかしたら愛理さんだけになってしまったように見えた。

ちょっと心配になった私はバイトの日では無いという護をファミレスに呼び出してちよっと相談していた。

「ねえ護、やっぱり愛理さんって結構かたくなな性格なんだね。クラスで孤立しているようにしか見えないよ」

今日は愛理さんはクラス委員の仕事があると言うことで新吾と一緒に教室で仕事をしているらしい。

「そうはいつでもな、本人が根本的に統合に反対している理由が結姫は女子校だと言う主張だろ？俺にはどうしようもないよ」

たしかに護の言うことはもっともだ。私だって結女の生徒だったら統合に反対するかもしれない。

「さて、一応人を見る目は一番良いと思う尊の意見も聞いておこうと思うが・・・いいよな？」

「うん、護が良いなら良いよ」

私の返事は決まっているけど一応聞くんだよね護は。

尊君にメールを打った後、護は私にドリンクバーをおごってくれた。「どうせメールなんて見ないだろうから電話にしとけば良かったかもしれないが・・・」

あ！そっか、尊君には許嫁が居たんだった・・・リア充め・・・。

さて、その返事なんだけど10分以上経っても返事がない。

「こないね・・・」

「そうだな・・・よし、なんかケーキでも頼めよ。奢るから」
護の予期せぬ一言に私は驚いた。

「え！？良いの？」

驚く私をよそに護は

「まあな、どうせ3割引だし」

ああ、そういえばこのファミレスって護のバイト先だったよ・・・。

「じゃあ決まったら言ってくれ」

そういつて護は鞆からライトノベルを取り出して読み始めた。

数分後

護が店員さんと呼んで注文を取りに来た

「じゃあ、ホットファッジジュニアとダブルチーズケーキ」

「はい、ホットファッジジュニアがお一つ、ダブルチーズケーキがお一つですね。以上でよろしいでしょうか？」

店員さんもハキハキとしてやってぱりこの店っていつ来ても良い雰囲気だよね。

「はい、それをお願いします」

店員さんが言った後

「金を払わんとは言わんが、そんなに食ったら太るぞ？」

ああ、そういう風に受け取るんだ・・・。

「平気、だって一つは護用に注文したんだもん。好きでしょ？チーズケーキ」

いやもう17年くらい友達やってると気にならないよ？

「ああ、そういうことか・・・悪いな、気を遣わせた」

そういつてまたライトノベルに目を落とす

スイーツがきて適当に食べながら店内を見回すと・・・あれ？あの

店員さんは見たこと無いぞ？・・・いや見たことあるけど見たこと
ない・・・どこだろうか？

「ねえ、あの店員さんって・・・どこかで見たことがあるんだけど。
護は知ってる？」

護がライトノベルから目を離す

「だれ？」

護もキョロキョロと見回し始める

「ほらあそこの背の低い人」

うん、小さいよね、中学生？

「ああ・・・あれは・・・本人に確認をとった方が良いな・・・」
なんか困ってるけどどうしたのかな？

「やっぱり知ってる人？」

「いや、たぶんアンジェも知ってるよ。呼んでみれば？」

次色へ続く

第8色「変わり始めたクラス」そして彼女は」(前編)(後書き)

新吾「後書きで！」

歌織「主人公紹介コーナー！」

エリー「歌織さん！それ私の台詞！」

新吾「と、言うことで今回は護の代わりに「乙女はお姉様に恋してる」群青の君」より鷺宮 歌織さんに来ていただきました」

歌織「よろしくお願いします」

エリー「はい、お願いします」

新吾「さて、今日は作者も護すら居ませんがちゃんと主人公紹介していききたいと思います」

エリー「はい、今日紹介するのは私の幼なじみの坂井 護です。それでは歌織さん紹介をお願いします」

歌織「はい、坂井 護、7月17日生まれ、血液型はO h型(O型の亜種)。身長、173?。好きな物は紅茶」

新吾「紅茶って言うのはまた珍しいですね」

エリー「ハーフだけどお父さんがイギリス人だからね。やっぱり紅茶の国イギリスで幼少期を過ごしただけあると思う」

歌織「護さんはイギリス育ちなのですか？」

エリー「うん、小学校に上がるまでは英国にいたらしいよ」

新吾「それは初めて聞いたよ」

歌織「性格はぶっきらぼうに見えてとても冷静で温厚。怪談や怪物は大の苦手で聞いただけで悲鳴をあげる。女っぽい顔に女っぽい声が本人のコンプレックス」

エリー「そうそう、護に怪談を聞かせるのが私の趣味なんだよね」
歌織「あまり良い趣味とは思えませんよ？」

新吾「でも、映画とか映像で流れてる怪物系とか大丈夫だったよ？
普通にバイオ4見に行ったときも平気だったし」

エリー「なんか作り物だってわかれれば平気なんだってさ」

歌織「彼の場合、所詮人が作った物だという認識があれば恐怖はなくなる物なのでしょうね」

新吾「そうかもしれないね。次は・・・コンプレックスか」

エリー「え？でも昔から女の子っぽい雰囲気を持ち主だったよ？」

歌織「なんか分かる気がします」

新吾「第1色で瀬名さんと桜乃にお姉ちゃんって言われてたしね」

エリー「たぶん胸にパットとか入れれば大丈夫でしょ？全然女の子
キャラでいけると思うんだ」

歌織「その前に本人が再起不能になると思うのでやめてあげてください」

新吾「俺もそう思う」

新吾「さて、そろそろお別れの時間になってしまいました」

エリー「あーあ、次の出番は来週か・・・年越しまでにはだい10
色位には進んで欲しいよね」

歌織「それでは私はこちらの撮影に戻らせていただきますね」

新吾「はい、では最後の挨拶だけ一緒にお願いします」

エリー・歌織・新吾「」「次回もお楽しみに！」「」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

第9色「変わり始めたクラス」そして彼女は」(中編)

とりあえず呼んでみよう

「すいませー・・・」

携帯？

F m・緑川 尊徳「M l e 1 9 1 4 — p 9 0 r r @ S a n L e x a
r . n e . j p」

タイトル・Reクラス

添付ファイル・ナシ

本文・・以前とは全く逆になったって感じかな。以前は瀬名さんがクラスの中心にいたからクラスが反男子みたいになってたけど、今は瀬名さんがクラスに溶け込めてないと思う。

「やっぱり尊君も孤立してる風に思うんだってっさ」

私がそう言うのと護は

「え？・・・ああ、そっか、あの馬鹿もそう思うって事は結構孤立してる風に見えるんだろうな」

？ 何かほかのこと気にしてた？

「どうしたの？」

聞いてみると

「何が？」

何がって・・・あれ？ライトノベルしまったんだ。

「あ、そう言えば店員さん・・・いない・・・」

いつの間に？休憩？

「そう言えば時間的にシフト交代だな、もうバックに戻って着替える頃だからまた今度見たら聞けばいいよ。じゃあ俺は会計済ませる帰る」

そう言って伝票を持って席を立ったので私も続いた。

「ちょっと、まだホットファッジ食べ終わってないよ！」
もう・・・そう言うところいつまで経っても分からないね。

「アンジェは食べてて良いよ、俺は会計済ませるだけだから」
いや、普通はお金払うし退席だよ

「もう。待ってよその理論はおかしいから・・・」
とりあえず座ってもらって・・・

「全く、別に良いだろ、早く場面を変えたいんだよ」
今作者の声入ったよね？

数分後、そろそろお開きになり帰ろうとしたところで

「あれ？もしかして筆箱が入ってない!？」

バックの中を確認したところで久しぶりにやってしまったあ・・・
「ごめん、護。一緒に来てくれるよね？」

夜道は物騒だし・・・

「はいはい、送ってけば良いんだね」

護のバイクで学校に戻ることに・・・

エリーゼSide End

護Side In

時間を確認。

日没まであと15分か・・・送ってくしかないな。

メットを二つ唯しておいて正解だったかもな。

アンジェをパッセンジャーシートに乗せて学校に戻った。

ああ、なんかバイクが重い・・・いや、アンジェは軽いよ？軽いけど人一人分の重さは重いんだよ・・・

バイト先から学校まではバイクで10分もかからないので直ぐに着する。

もちろん本当は公園を抜けるルートが一番良いのだが・・・

「・・・!？」

曲がり角を曲がったとき、そいつがいた・・・。

「どうしたの？護？」

いきなり止まった俺に疑問を投げかけるアンジェ

「ごめん、猫だ・・・」

ブレーキ痕あり、車だな。

「生きてるよね？」

アンジェが心配そうに聞く

「大丈夫、しんではないが・・・前足が折れてる可能性があるが・・・」

タイヤがロックするほどのブレーキをかけたって事は相当なスピードだな

「ブレーキ痕から見ると大型トラックだ。タイヤサイズは275クラスでリアがダブルタイヤ。ホイールベースは約10メートルだから11トンクラスのトラックだ」

※護はバイク好きですがだいたいの車の知識を持っています。基本的に流し読みが推奨されます。

猫を抱きかかえようとする猫は暴れようとする

「頼むよ、大丈夫だから・・・な？」

そう言う猫はそれを理解してくれたのかそれとも体力が無くなったのか静かになった。

「私が預かっておくから護はどうしたらいいか考えて！」

そう言ってくれたので俺はおとなしくなった猫をアンジェに預け

「獣医か・・・さもなくば・・・」

あいにくここは住宅地のご真ん中、そんな技術を持ち合わせる人もいなければ病院だって・・・

どうにもならない状況でスマホを取り出して獣医を検索しようとし

た瞬間

「護じゃないか、どうしたんだ？」

知っている声が俺に耳に入った。

「新吾！ちようど良かった、悪いんだがここいらで獣医か何か知らないか？」

まあダメ元だったよ、でもほら新吾地元だし

「ああ、それなら・・・」

新吾のツテで俺達は結女のぬこ部というところに猫を担ぎ込んだ。

「うん、ちよつと足を捻挫してるだけみたいだから、2〜3日安静にすれば大丈夫だと思うよ」

そのぬこ部の部長さんが天羽みう先輩。小さいよな。うん、1年生かと思った。

俺の身長が173センチだから・・・—30センチくらい。

でも俺、新吾と良い勝負だからなあ・・・身長としては175センチくらいは欲しい

「でもすごいね、暴れる猫を一言で懐かせちゃうなんて」

なんか天羽先輩に関心されてるんですけど・・・

「そ、そうですね・・・」

苦笑しておこう。

「ぬこ部はね、傷ついた野生の動物を保護して自然に返す活動をしてるんだよ」

ああ、なるほど・・・。

しかし天羽先輩が残ってくれて良かったな

「あ・・・あのさ、護・・・」

そう言えばアンジェ？

「お前、猫以外の動物はからっきしだめだよ・・・」

そうエリーは自宅に猫を飼っているため猫は大丈夫なのだがなぜかそれ以外の動物がだめらしい

「ほら、リスとかかわいいのに・・・もったいない」

結局アンジェは一応リスに触れるほどにはなったと思う・・・。

とりあえず、今日は解散し明日早朝に改めてここに来て欲しいと言われて今日は解散した・・・

「何か忘れてる・・・」

帰り道でアンジェがそうつぶやくと・・・

「筆箱だな・・・」

そう、アンジェの筆箱を完全に忘れていたのだった・・・

次色へ続く

第9色「変わり始めたクラス」そして彼女は」(中編)(後書き)

新吾「さて第9話、いかがだったでしょうか？」

エリー「まあちょっと醜態をさらしてしまっただけと言いたいようないわね・・・まさかリスごときで・・・」

護「見栄ばっかはってるからな」

エリー「へー、ある日閉店間際のスーパーに飛び込んだら・・・その店の店員が全員・・・足が無かったんだって・・・」

護「ちよつと待って、待って！その話は後でね、ね！お願いだから・・・」

新吾「えーっとそれ以上は護の精神的にアウトだからね」

作者「まあ、まあ。とりあえず後書きでそう言う話をするのはまた今度にしろよ・・・」

エリー「あ、無能力者・・・」

新語「それは違うって・・・」

護「まあ似たようなもんだしいいだろ」

作者「まあ、たたかれるのは慣れてるけどさ、ちゃんと正月企画のメンバーを招集に来たわけだし・・・」

作者「まあとりあえず、この人たちね。よろしく」

新吾「ああ、直ぐに消えていった・・・」

護「げ・・・招集されてる。面倒だな・・・」

エリー「私もだ・・・ママに出かけるって言わないと・・・」

新吾「とりあえずぐだぐだだけで締めようか」

護「そうだね」

エリー「それでは、次回もよろしくおねがいます」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2480x/>

ましろ色シンフォニー～Another Symphony～

2011年12月26日21時49分発行